最終回 孤立死と自殺

「長生き」は万人に幸せなのか？ ゴミ屋敷、ネコ屋敷の「地獄絵図」

孤立する老人たちのキテレツな現場から

健康で長生きしたい――誰もが否定しない常識だろう。しかし、社会的役割を解かれ、誰からも必要とされず、注目はおろか興味も持たれない。達成感や充足感とは無縁の、砂を噛むような時間が延々と続くとしたら……それこそ「生き地獄」ではないのか。最終回は心を閉ざして孤立したまま、やがて死に至る老人たちの実態をレポートする。

取材・文／新郷由起（ジャーナリスト）

「放っておいてくれ、もう来るな！　孤立死の何が悪い!!　独りで死ぬんだ、孤立死バンザ～イ！」

地域支援包括センターのケアマネージャーに同行して取材を試みた際、ある独居男性（79歳）はチェーン鍵を掛けたまま、薄く開いたドアの向こうで叫んだ。

「『かまわないでくれ』と居留守を使ったり、いくら訪問しても窓から少し顔を覗かせるだけで玄関を開けようとしない高齢者は決して少なくありません。家のドアは心の扉と同じ。頑なに外部との接触を避け、人の介在を拒み続ける〝引きこもり〟の高齢者宅は、得てして物やゴミが室内に散乱し、場合によっては排泄物も溜め込んでいます」（都内・民生委員）

ゴミと糞尿にまみれて死んだ独居老人

3年前、70歳で孤立死した独居男性宅に立ち入る機会を得た。67歳で突然妻に先立たれた男性は、家事の一切を妻に頼っていた元〝仕事人間〟。食事の支度はおろか、掃除、洗濯、ゴミ出し、全てに不慣れで、日常生活は一変する。食事はコンビニ弁当やインスタント食品のみとなり、洗濯が面倒で洋服は何日も同じ物を着続ける。物は出しっぱなしにして片付ける意思も気力もなく放置。ゴミ出ししようにも分別の仕方と出し方が分からず、それら一切が3DKのマンションの室内に徐々に積り上がっていく。

男性本人に近所付き合いはなく、気位の高さから周囲へ助けを乞うこともできない。「迷惑は掛けたくない」と、他県に住む息子と娘にも泣きつけない。気晴らしのための飲酒量ばかりが増して、そのうちに体調も悪化。トイレへの移動も億劫となって鍋やレジ袋内に排泄を済ませ、汚物までもが散乱し始めた。

先の民生委員が続ける。

「室内の状態が酷くなると、人に知られまいとして、さらに他者との関わりを拒むようになります。一度社会との接点を断ち切ると、あとは自らの殻を厚くして閉じこもることに腐心する。外界からの適切な働きかけがない限り、自然な自己快復はあり得ません」

男性は死後約3カ月、大人の胸元辺りまで堆く積まれた物とゴミの隙間で、糞尿にまみれ、虫やネズミに食い散らかされた遺体となって発見される。清掃と消毒が済んだ状態で室内に入るも、独特の悪臭は窓サッシの溝にまで沁みこんでおり、強烈な目眩と吐き気に襲われた。

日本初の遺品整理会社「キーパーズ」代表の吉田太一氏が実情を説く。

「電化製品などを拾い集めては自宅の敷地内へ溜める〝ゴミ屋敷〟は主に一軒家に多くて人目につきやすく、行政の立ち入りや集積所が廃止されるなどして減少傾向にあります。一方で、ペットボトルなどの生活ゴミを室内に溜め込む〝ゴミマンション〟〝ゴミアパート〟は、ドア一枚で中が窺い知れないこともあり、近年急増傾向に。積雪のごとく、1・8メートル超の惨状も珍しくなく、1メートル進むのに2時間を要する部屋もあります。高齢者においては『干渉しない、されたくない』と、自身の人間関係を排除する〝砦〟的役割すら担っている」

4畳半に26頭の犬猫 心の隙間を動物で埋める

クレプトマニア（窃盗癖）の専門医・竹村道夫氏が「溜め込みマインド」と説明した、心の隙間をモノで満たす心理。それは、物品ばかりとは限らない。

生活保護受給者である、76歳女性が住む千葉県内のアパートへ関係者と共に出向いて目を疑う。

風呂なしの4畳半の和室に2畳ほどのキッチンがついた間取りの玄関ドアを開けると、スーパーの買い物カゴ2つ分ほどの大きさの檻（ゲージ）が天井近くまで上に4～5段積み上げられ、室内中が目一杯の檻で埋め尽くされていた。その数、22個。中には計26頭もの犬猫が収容されており、いずれも目ヤニや鼻水、よだれでグチャグチャになった顔で恨めしそうな目をしながらヒステリックに鳴き喚いている。なかには、ぐったりと力なく横たわっている子猫もいた。

檻の中に敷かれた新聞紙で処理が足りるはずもない排泄物は部屋のあちこちに垂れ流され、周囲には大量のゴミが積り、ホコリだらけのカーテンは引きちぎられ、強烈な糞尿とゴミの饐えた臭気を伴って、一種異様な地獄絵図の様相だ。

飼い主のいない猫の保護や不妊・去勢手術、里親探しをするNPO法人「ねこけん」代表の溝上奈緒子氏が吐露する。

多頭飼育崩壊現場の一角。ホコリまみれのゴミ溜めのような室内で、生き残っていた栄養失調の猫

散乱したゴミと排泄物にまみれた引きこもり高齢者の悲惨な「最期」

「最近は、高齢者が屋外にいる犬猫を拾ってきては室内に集めて飼育し、自身の健康上の理由から世話ができなくなって〝多頭飼育崩壊〟に至るケースが後を絶ちません。しかも金銭的に困窮している世帯が非常に多く、避妊・去勢手術費用も捻出できないため、場合によってはネズミ算式に頭数が増えていたり、産ませてすぐに子猫（犬）を殺して対処していたりするケースもありました」

前述の女性も高血圧とヘルニアの悪化、認知症の発覚から入院となり、室内の惨状が明るみに出た。

同氏が付言する。

「私たちがレスキューに入った崩壊現場の6割以上は高齢者宅です。血縁者や地域住民との関係性が希薄で身寄りのない老人が多く、『外にいるのがかわいそうだから』と拾ってくる。ボランティア団体などが増え過ぎた犬猫を引き上げても、また外から集めてきてしまうのです。そして、どんなに諭しても、『死ぬ時は一緒』と手放したがらないのも共通する特徴のひとつです」

お金もなく、関わってくれる人もいない。寂しさを紛らわし、自分を必要としてくれる対象者として、物言えぬ動物にすがる高齢者たち。「かわいそう」と憐れむのは、知らず、自身を投影してのことなのか。

押入れに詰め込んだゴミも溢れ出した室内。「ゴミの堆積が膝下以下は、すり足で進める"プチ"レベル」（吉田氏）

独居よりも同居世帯のほうが自殺率は高い

現在、65歳以上の高齢者がいる世帯数は2096万世帯と、全世帯数（4817万世帯）の43・4％を占めている。内訳では、一人暮らし高齢者世帯（16・1％）の増加が年々顕著にな

しんごう・ゆき● 1967年北海道生まれ。イベント関連業務に従事後、93年より文筆業へ。『週刊文春』記者を経て、主に「親子関係」「家族の終末の形」をテーマに取材・執筆を続ける。

一人暮らしより同居で身内から疎外された老人のほうが孤独

っており、夫婦のみの世帯（37・5％）と合わせると、両者で過半数（53・6％）を超す割合だ。（内閣府「平成26年版高齢社会白書」より）

ただし、一人暮らしや老夫婦二人だけの生活は寂しいだけ。子や孫と一緒に暮らしてこそ豊かな老後だ――といった通説は、現実には幻影に過ぎない。

「仲が悪いようには見えなかったですねぇ。新築当初は3世代で家の前で一緒にいる姿も見掛けましたけど、おばあちゃまが先立たれてからは、とんと……」

と、話してくれたのは、二世帯住宅の下階の一室で76歳男性が首吊り自殺した現場の近隣者だ。

都内にある閑静な住宅地。長男夫婦と暮らすため、老夫婦は実家を二世帯住居に建て替えた。1階と2階、それぞれに玄関を設けて互いの生活に干渉せずに済む造りとし、2階に長男夫婦と幼い子ども2人を住まわせる。普段は各々の生活を送りながらも、必要な時には気兼ねなく互いが行き来できる理想的環境となるはずだった。ところが、入居1年後に74歳女性が脳溢血で急逝。残された男性は一人で下階に暮らしていたが、翌年、居間にある飾り棚のフックに縄を掛けて自らの命を絶った。

テーブルの上にあったメモには走り書きで「妻に会いに行きます」とだけ。後追い、及び、持病の高血圧を苦にした自殺として滞りなく処理された。

今年、『孤独な死体』を上梓した、元東京都監察医務院長・上野正彦氏が喝破する。

「一人暮らしより、同居して身内から疎外される老人の方がずっと孤独なのです。事実、独居よりも同居世帯のほうが自殺率は高い。現在、自殺者の約4割は高齢者で、動機のトップが病苦とされています。ただ、60年、70年以上も人生の荒波を乗り越えてきた高齢者が、神経痛や糖尿病といった病苦で自死を選ぶでしょうか？　彼らは遺書に恨み辛みを書きません。そして、残された家族らは本人を粗末にしていた事実を明かしません。孤独に耐え切れずに自死した高齢者の真実は、データの裏にこそ隠されているのです」

警察庁「自殺統計」によれば、年齢別に見た自殺者の最多層は60～69歳。最も多い原因・動機は「健康問題」で、60歳代が56・4％、70歳代では68・3％、80歳以上では実に72・6％となっている。

感情を発露する場所がどこにもない

当連載では自身の満たされない思い、押さえ切れない衝動を、万引きやDVをはじめとした反社会的な行為で表出させる高齢者の実態をレポートしてきた。それはどこかで、自身の存在に気づいてほしい、生きる価値を認めて欲しいといった願望の表れでもあり、生き続ける意味を世に問う自己表現の一環としての側面も持ち合わせていた。

しかし、エネルギーのベクトルが内へと向けられたら――。

外を歩けば、無邪気に遊ぶ子どもたちと出くわす。笑ってはしゃぐ若者らが行き交い、楽しげに談笑する恋人たちや仲睦まじげな夫婦の姿も目に入る。忙しそうに立ち回る働き盛りの男女は足早に通り過ぎ、死へ向かうだけの自分とは対極に、キラキラと眩しく映って見える。彼らの未来が、羨ましい。希望が、妬ましい。夢が、悔しい。憎い。

一切を拒絶し、遮断することは、唯一、自分を傷つけずに守り得る術となりはしないか。

「現役を退いた高齢男性は自宅に引きこもる傾向が顕著です。通常の施設では、何をやっても『つまらん！』と怒り出す彼らが、外出を楽しみにする場所を提供したかった。高齢者だからこそ、辛気臭い場所へは行きたがらないのです」

と話すのは、昨年末、東京・足立区に国内初めてのカジノ型デイサービス施設「LAS VEGAS」を展開した「日本エルダリーケアサービス」代表取締役・森薫氏だ。

バリアフリーの広い室内には、バカラとブラックジャックの専用テーブルの他、パチンコ、パチスロ台、麻雀卓が設置されており、施設内通貨を使って各自が自由に楽しめる。什器や遊具はどれも本格志向で、落ち着いた雰囲気を醸している。ゲームに興じる高齢者の目は皆真剣そのもので、「ヤッター！」「ありゃりゃ～」など、明るく、朗らかな声が、若いスタッフの拍手や笑い声とともに部屋中に絶え間なく響いていた。

「一部では『介護保険を使って遊ぶなんて』といった批判的なご意見を聞くこともあります。では日中、行く所もなく、人と話すこともなく、一日中自宅に閉じこもったまま、楽しみもなく枯れるのが果たして理想の〝老い〟でしょうか？　日本では、老後は耐えるのが美学で、楽しむことを罪悪と捉える節があります。でも、感情を何かでどこかにぶつける機会や、年下の異性と話したり、日常のストレスを発散する場所は、人が人として生き続ける限り絶対に必要なのです」（前出・森氏）

ただ〝枯れるだけ〟には長くなり過ぎた余生

周知の通り、この国はかつて経験したことのない未曾有の「老人大国」へと突き進んでいる。

平均寿命は直近で男性80・21歳、女性86・61歳（2014年7月、厚労省公表）と、さらに更新され、世界一の長寿国となった。

しかし、長生きは本当に万人に幸せなのか。

取材中に出会った84歳の女性は、「カレンダーは塗り絵。残ったマス目を塗りつぶすだけの日々」と力なく笑った。72歳男性は、「毎日考えることといえば、朝起きて、一日に使える1000円札1枚の使い道だけ」と嘆息した。

残りの人生を誰もが生きがいを持ち、胸を張って送れるのなら問題はない。

しかし、取材を通じて浮き彫りになったのは、持て余す時間とエネルギーをどう使ってよいか分からず、老いのジレに焦りながら迷走を続ける、不器用な高齢者の姿だった。

社会的役割を解かれ、誰からも必要とされず、注目はおろか興味も持たれない。やることも成すべきこともなければ、生きる目標も見当たらない。達成感や充足感とは無縁の、砂を噛むような時間が延々と続くとしたら……それこそ「生き地獄」ではないのか。

シルバー人材センターに登録した73歳男性は、「1件の仕事にありつけるのに半年待ち。今日も一日、日が暮れるのを待つだけ」と、呆けたように河川敷のベンチに座り続けていた。

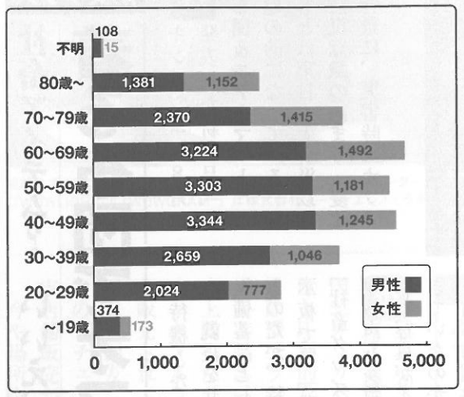
自覚なくストーカーに転じてしまった71歳男性は、「あの時は情熱を燃やせて一日が充実していた」と夢見るように回顧し、次の取材先へ急ぐ筆者を「忙しそうだね。いいなぁ」と見送ったのだった。

彼らの持つ虚ろな時間を、活力を、能力を、空費させることなく、社会の何かへ生かすシステムづくりが急務ではないのか。ただ「枯れるだけ」で日を費やすには余生はあまりにも長くなり過ぎたのだ。

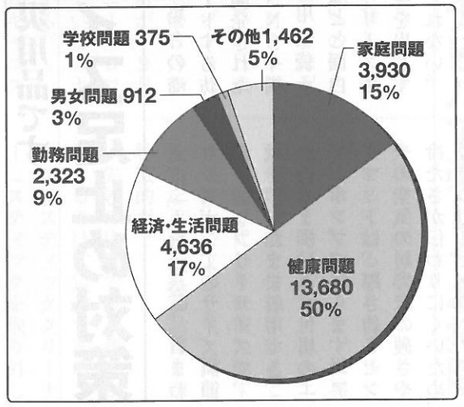
毎日に「やることがある」幸せと、血を滾らせて生きる「充実感」を。

高齢社会の新たな課題であり、新しく噴出した社会問題といえよう。

年齢別自殺者数（平成25年度）



原因・動機別自殺者数（平成25年度）



ともに警察庁資料より